

同志社との出会い、それから

奨励	小瀧 秀夫【おだき・ひでお】
奨励者紹介	新島学園中学校・高等学校教頭

皆さまこんにちは、群馬県の安中市にあります新島学園中学校・高等学校から参りました小瀧と申します。

今日は、同志社の一卒業生として、そして同志社に連なる学校に働く者として、「同志社との出会い、それから」と題してお話しさせていただきます。私の尊敬する恩師であり、同じく同志社の卒業生として第二次世界大戦前から、戦後の混乱期に農村での開拓伝道で活躍し、その経験を踏まえて同志社大学神学部教授として、同志社大学学生部長として母校同志社を大いに活性化させ、やがて故郷上州群馬の地で一弱小中学であった新島学園を敏腕と温かい愛情で育て上げた、故・岩井文男先生の生涯から私が学んだことを中心にお伝えできればと思っています。

今回お話しさせていただくことを決心したのは、岩井文男先生が「上州の地にキリスト教主義の大学を」と設立された新島学園女子短期大学に、新島文化研究所主任として奉職され、現在同志社大学神学部教授・キリスト教文化センター所長である原誠先生が中心となって出版された『敬虔なるリベラリスト 岩井文男の思想と生涯』との出会いがあったことでした。この本なくして私の「同志社との出会い、それから」はあり得ません。あらためまして原先生のご功績に敬意を表すると共に感謝申しあげる次第です。

それでははじめに私の自己紹介をさせていただきます。小瀧(おだき) 秀夫(ひでお)と申します。私の最初の同志社との出会いは今から三十八年前の一九七二年同志社大学文学部文化史学科への入学にさかのぼります。一九七六年に卒業しましたが、正確には同志社大学体育会のスキー部を卒業したと申しあげるべきかもしれません。私の学生生活はスキー部の活動を中心に回っておりまして。当時は通年制で、一月から二月にかけての後期試験期はスキー部の大会シーズンと重なり、四苦八苦しながら試験を乗り切った記憶が残っております。そんな学生時代ですから、学術的なお話はもとより、スピリット・ウィークでお話しされる他の先生方のような有益なお話になりませんことをあらかじめお許しいただきたいと存じます。

同志社大学体育会スキー部は今年で創立七十周年を迎えます。明後日の十一月六日に七十周年記念式典があり私も出席する予定です。ここにいらっしゃる学生の皆さんも体育会や文化部のサークル等で活躍され、多くの貴重な経験をされていることと思います。私もこの同志社スキー部で社会人となるための基礎を身につけました。

同志社を卒業し、さて就職となった一九七五年から七六年は第一次石油ショック直後の大不況で、就職活動は困難を極めました。就職担当の先生が、私たち四回生を寧静館だったでしょうか、大教室に集め「皆さん、就職は一に縁故、二に縁故、三、四が無くて五に実力です」と言って就職状況の厳しさを訴えられていたことをよく覚えています。

そんな状況下、私は幸いにも母校新島学園中学校の社会科教師としての職を与えられました。そのとき新島学園の校長として私に声を掛けて下さったのが今日のお話の中心となる岩井文男先生でした。一九七六年に奉職し、今年で曲がりなりにも三十五年目を迎えました。ふり返って正直なところ「私のような者がこれまでよく勤まったものだ」というのが実感であります。これは謙遜でも何でもなく事実であります。よく岩井先生は礼拝の説教で、「謙遜とは真に力のある人ができること」と述べられていましたが、正にその通りであります。

私と同志社との出会いは再び与えられました。昨年の春学期、同志社大学神学部の研修員ということで約半年間、今出川キャンパスや京田辺キャンパスで皆さんのような若い学生さんたちと一緒に学ぶ機会を与えられました。私はこの機会に、三十年余の新島学園での教師としての生活をふり返り、また、「新島襄と同志社について」勉強させていただく貴重な時間を与えられました。本井康博先生や原誠先生をはじめとする神学部の先生方との出会い、私の子どものような若い学生さんたちとの交わりは、改めて同志社大学の教育や校風の素晴らしさを再確認する貴重なひとときでありました。

とりわけ、同志社は新島学園のルーツであり、「新島襄と同志社について」学ぶことは大げさに言えば、私の勤務する新島学園のレーゾン・デートル(存在理由)を再確認することでありました。「同志社と新島学園」について学び直すなかで、一番に私の心を捉えたのがやはり、今日のお話の中心となる「岩井文男先生」の存在でした。

新島学園について

次に、岩井先生が校長を務め、私が勤務しております「新島学園中学校・高等学校」についてご紹介致します。新島学園は今年創立六十三周年を迎えましたが、実はその種は新島先生がアメリカより帰国した一八七四年に蒔かれております。新島先生は東京から人力車を飛ばし、両親の住む群馬県の安中に向かい、約十年ぶりに家族と再会を果たしますが、この故郷安中で近隣の人びとを集め帰国後最初の説教を行います。その説教に感化された人びとの力によって後に安中教会がつくられ、この安中教会の関係者によって、第二次世界大戦後の一九四七年に新島学園が設立されました。ですから、私たち新島学園関係者は新島学園の種は今から一三六年前に蒔かれた、つまり同志社英学校の創立の一年前と、とらえております。

こんなことを申しあげると、同志社の関係者から、新島学園が同志社より古いはずがないとお叱りを受けるかもしれませんが、種が蒔かれただけですのでお許しいただきたいと思えます。

初代校長・理事長は同志社の総長を務められたこともある湯浅八郎先生、第二代校長は新島先生の弟子で、非戦論者の柏木義門の長男柏木準雄先生といった同志社ゆかりのそうそうたる先生方の後を受けて、一九六一年第三代校長として岩井文男先生は就任されます。今でこそ学校として十分とは言えないまでもそれなりの施設設備をもつに至りましたが、岩井先生が赴任当時は木造平屋建てのオンボロ校舎がつかるとても学校としては恥ずかしいくらいの内容でありました。

岩井先生が八十一歳でお亡くなりになった追悼礼拝において、かつての同志社神学科での級友、棟方文雄牧師はその説教のなかで「岩井さんは同志社神学部教授・学生部長の職を捨てて、給料が半分になる新島学園に行くぞうだ。同志社に残れば行く末は総長になったかもしれない人なのに、と牧師仲間のうわさになったことがあるんです。」と話されていたことを思い出します。後ほどお話いたしますが、一般に損か得かの選択を迫られたとき、岩井先生は常に損な道を選ばれていらっしゃいました。

岩井先生は新島学園の校長に就任すると、持ち前の才覚と人を引きつけて止まない人間的な魅力で多くの賛同者を得、冬には浅間おろしの寒風吹きさすオンボロ校舎を近代的な鉄筋3階建ての校舎に建て替え、群馬県私中高協会のトップに就任し、新島学園のみならず群馬県の私学財政の立て直しに大いに貢献されました。また、新島学園と同志社大学との間に強いパイプを築き、毎年新島学園から推薦入学で沢山の生徒が同志社大学に入学できる道を切り開いてくださいました。不肖私もその恩恵で同志社に学ばせていただきました。現在新島学園は中高六学年で一二五〇名の生徒が在籍し、毎年三十名から四十名の生徒が同志社大学・同志社女子大学に進学し学んでおります。

私の岩井文男先生

それでは本題の岩井文男先生から学んだことについてお話ししたいと思います。私は高校三年生のときに、岩井先生から宗教の授業を受けました。そのときのエピソードですが、学期末の定期試験でのごとく、あるテーマについての作文が課され、私はヤマが外れ、そのテーマについて論述する知識をもち合わせておらず、関連するテーマについて述べたところ、先生は採点後のコメントで「君の言わんとすることは理解できるが、僕はそんなことを君に問うているのではない。これからは質問の内容をよく読み、それについて述べるように」との注意書きが添えられていました。私は合格点のついた答案を冷や汗をかきながら、読み直したことを思い出します。

岩井先生の生涯を戦前と戦後の関係年表で辿ってみたいと思います。

先生は一九〇二年(明治三十五年)のお生まれで、ちょうど私の祖父の世代に当たります。八十一年のご生涯で私が先生から心を揺り動かされたエピソードな出来事をひらいてみたいと思います。

〔第二次世界大戦前〕

- ①一九二四年 二十二歳で一年志願兵として宇都宮歩兵第六十六連隊に入営
- ②一九二九年 二十七歳で結婚、三井銀行退社、京都府草内村で農村伝道に従事
- ③一九三四年 三十二歳で同志社大学文学部神学科に入学
- ④一九三七年 三十五歳召集で群馬県高崎歩兵五十五連隊に入営
- ⑤一九四〇年 三十八歳で復員除隊後、渋谷基督教会に復職

〔第二次世界大戦後〕

- ①一九四六年 四十四歳で岐阜県の坂祝(さかほぎ)村に教会を設立、牧師に就任、農村伝道に従事
- ②一九五二年 五十歳の時、同志社大学宗教部主事に就任
- ③一九五七年 五十五歳で同志社大学神学部教授、同志社大学学生部長に就任
- ④一九六一年 五十九歳の時、新島学園中学校・高等学校の第三代校長に就任

以上の出来事から「岩井文男の思想と生涯」を私なりにまとめてみたいと思います。

この写真は、岩井文男先生が同志社大学の予科に入学して間もないころのもので、聖書を学ぶ「ヨセフ会」の関係者とクラーク神学館現在のクラーク記念館)前で記念撮影したものです。後列左から二人目の岩井先生の帽子に注目して下さい。他の学友の方々が学帽をかぶっているのに、岩井先生は軍隊の帽子をかぶっています。先ほどのエピソードな出来事として取り上げましたが、先生は一九二四年に二十二歳で志願兵として軍隊に入隊しております。学生ですから兵役免除の資格もあつたはずなのに、あえて志願兵として入隊しています。ご本人は体を鍛えるためと言っていますが、時代は平和な今日とは異なり、徴兵制があり、若者は国を守るために、武器を持って戦うことを義務づけられていた時代です。そのような時代に学生だからといって免除されてよいものか、といった思いが岩井先生の心の中にあつたように思うのです。

さらに一九三七年、三十五歳のとき、こちらは召集で志願兵ではありませんが、足かけ四年にわたり再び軍隊に入隊しています。すでに結婚し、子どもさんもあり、東京で伝道師に就任しておりましたから、公私ともに後ろ髪を引かれるような出征ではなかったかと思います。軍隊入隊中には、基督教聖公会員の隊長や戦友に恵まれ、兵器を取り扱う訓練では表彰されたこともあったようです。ここで誤解されては困るのですが、岩井先生は戦争の肯定論者では決してありません。後でも触れますが、平和主義者であり、自由主義、民主主義論者でもありました。しかし時代がそういう時代であったということです。そんな時代に同じ若者として、軍隊を避けてばかりはいられないという岩井文男の気骨を、私はこの写真の軍帽から感じるのです。

一九二九年、岩井先生は新藤牧江さんとご結婚されました。これは、結婚式のときの写真です。この後すぐに、岩井先生は昭和恐慌の大変な就職難の時代に、難関を突破してせつかく就職した三井銀行をあっさりと退職し、「日本労働者ミッション」の派遣員として、京都府草内村で農村伝道に従事します。当時のエリートである職を投げ打って、一人ではなく奥様も巻き込んで、当時最も貧しく差別されていた農村に飛び込み、キリストの教えを基に農村・農民の解放に情熱を注ぎます。その後も岩井先生は、一九三二年に岐阜県賀茂野で、第二次世界大戦後の一九四六年には、岐阜県の坂祝村で農村伝道に従事します。何故そこまで岩井文男は農村にこだわったのか、それは先生もおっしゃっていますが、先生ご自身群馬の寒村の出身で農村・農民のことはよく分かっているから、また、最も差別され、貧しい暮らしを強いられている農村・農民の人たち（世の中で最も困っている人びと）のために働くことがキリストの教えである、といった強固な信念があったと考えられます。

これは、賀川豊彦（日本近代の代表的キリスト教社会運動家で労働運動・農民運動・協同組合運動・平和運動において先駆的な役割を果たした）の傘下で、椎茸栽培の研修会を開催したときの写真です。岩井先生は合理的な椎茸栽培の方法を開発してその方法を惜しげもなく栽培農家に伝授したとのこと。この技術は画期的なもので、特許を取れば莫大な特許料が見込まれたといわれています。この技術を全国の椎茸栽培農家に広めることによって、穀物栽培だけに偏り、現金収入の乏しい農村・農民の暮らしをより良く、希望のもてるものにした、という「農村出身の農村伝道者岩井文男」の面目躍如たるところではないでしょうか。

岩井先生が二度目の軍隊生活を終え、東京渋谷の日本組合基督教教会に復職したときのものです。先生が働いた数少ない都会の教会でのスナップです。しかし岩井先生は戦争が終わると都会での牧師の職を辞して、また農村へと向かうことになります。

戦争が終結し平和な時代が訪れれば、やがて大都会の教会は発展するであろう。そこには「岩井文男」は必要ないと、自ら判断し、かつて開拓伝道に従事した岐阜県の農村からの求めに応じ、再び岐阜県の坂祝村で農村伝道に従事することになります。

こちらがその写真です。後方の藁葺き屋根の一軒家が岩井一家の住居であり、教会堂でありました。私の高校時代、岩井先生の礼拝での説教や宗教の時間に、この坂祝村での農村伝道時代のエピソードをよくお話しくださいました。

その一つにこんなお話がありました。それは奥様である牧江さんへの謝罪のエピソードです。奥様は東京のご出身で、結婚と同時に岩井先生と共に農村伝道に駆けめぐることになるわけですが、この坂祝村でのこと、終戦直後の何も無い時代、家族を養い生活していくためには作物を作らねばならず、支援者から借りた土地を耕すための牛馬を飼うことは資金難で出来ず、そこでどうしたかという、奥様が鋤を抱え、奥様の肩にロープを掛けて、岩井先生が牛馬となって田畑を耕したというお話です。その結果、ロープで引っ張られた奥様の背骨が若くして曲がり、猫背になってしまったとのこと。東京育ちの牧江さんが、若くして戦中・戦後の貧しく何も無い農村で夫と共に子育てをしながら農村伝道をするということは並大抵のことではありません。このようなことまでして家族を守り、教会をつくった時の岩井先生のお話は今でも鮮明に記憶しております。

奥様は『敬虔なるリベラリスト 岩井文男の思想と生涯』のなかで、「私の結婚や岩井との生涯は、基督教の信仰を試された、試練であった。」旨のお話をされていますが、あの岩井文男先生に、この牧江さんあり、と思わずにはいられません。私も岩井先生が新島学園の校長時代、何度も奥様の牧江さんとお会いしておりますが、あの細く小さな体を折りたたむようにして、当時二十代前半であった若造の私にくり返し、くり返し、お辞儀をされた姿が今でも忘れられません。

同志社から新島学園へ

さて、いよいよ新島学園という農村地帯にある学校への伝道に入りますが、その前に岩井先生は、農村伝道における活躍と、寝る間を惜しんで書き上げた論文が認められ、母校同志社に呼び戻され、一九五二年同志社大学宗教部主事に就任、一九五七年には同志社大学神学部教授、同志社大学生部長に就任されます。先ほどお話しましたが、そのまま同志社に残っていたれば、同志社発展のための大きな働きができたでしょうし、同志社での地位も約束されたものと思います。

しかしながら、ここでまた岩井文男は農村からの呼び掛けに応じ、故郷群馬の安中にある小さなキリスト教主義学校「新島学園」に赴くことになります。先ほどお話ししましたように、「新島学園」は同志社時代の給料の半分しか払えない、田舎の弱小私立中学校・高等学校でありました。岩井文男は最後まで一般人が考える、常に損な方を、人が嫌がる道を選び続けました。

この写真は毎朝守られている礼拝の一コマです。私は新島学園の生徒時代と教師時代と約七年間岩井先生の説教や授業を聞くことができました。今でも岩井先生の熱のこもった説教を思い出します。時には口角泡を飛ばし怒りをぶつけるようなときもあれば、穏やかに赤子を寝かしつけるような語り口のときもありました。しかしながら生徒たちの礼拝への姿勢は厳しく、おしゃべりでもしようものなら、「そこうるさい、話をやめろ」と大声で怒鳴られました。

これは私の新島学園教師時代のエピソードであります。もう三十年以上も前のことになります。勤めて二年目の時、中学一年生の担任を任されました。十二月のクリスマスを迎え、各クラスでクリスマス献金を募りました。若気の至りで、私はその献金が入った袋を職員室の机の引き出しに入れたまま帰宅してしまいました。その晩学校に泥棒が入り、私のクラスともう一つのクラスの献金が盗まれてしまいました。お金を学校に置きっぱなしにすることは論外であり、ましてや公金、私は意気消沈し、生徒保護者に謝罪し、当然のことながら盗難分は自分で立て替えることにしました。

翌日、岩井先生に声を掛けられ、「校長室に来るように」ということで、てっきり叱られるものと覚悟してでかけました。校長室では、学校での公金の管理の仕方等についてひととりのご注意とご指導を受けて、「気の毒だったが、今後気を付けてくれたまえ」とやさしく諭されただけでした。私は拍子抜けして、頭を下げて校長室を出ようとしたところ、岩井先生が封筒のようなものを私の上着の内ポケットに納めようとされました。私はとっさに、これは見舞金と判断し、「校長先生困ります。私の責任ですから」というような言葉を口走ると、岩井先生が鬼のような形相で「年寄りの気持ちは素直に受け取るものだ。」というような言葉を口にされました。訓戒をされているときよりもそのときの方が怖い顔をされていたことが懐かしく思い起こされます。人情味溢れる岩井先生の思いであります。

岩井文男先生の生涯をふり返ると、選択を迫られる場面で、損な方を、人の嫌がる道を選ぶことが多かったと、先ほどお話ししました。しかしながら岩井文男も人の子であり、同志社神学科時代の学友たちが洋行し、学識や箔をつけて、ある人は大学で、ある人は都会の大教会で活躍するのを横目で見、心穏やかならぬこともあったことでしょう。

東京の永福町教会牧師就任式辞のなかで、岩井先生は次のように述べられています。「私の過去もまたあの姿にも似た紆余曲折であった。時に私は牧者たる自信を失いかけたこともあった。七、八年前、自分と同年配の人たちが洋行し、堂々立派な牧師として臨んでいたところに、私は農村の片隅で、『友がみなわれよりえらく見ゆる日よ 花を買ひ来て 妻としむ』という啄木の歌を塵箱に書きつけたこともあった。若き日を思うて、甚だ慚愧に堪えぬ次第である」。私はここに何ともいえない岩井先生の人間くささを感じて、益々岩井文男のファンにさせられてしまいます。皆さんはいかがでしょうか。

元同志社女子大学教授、故・武邦保氏は、「岩井文男は数少ない生来のキリスト教農村伝道者であった。昭和初期の都市型志向の発展を戦争や非人道の現れとして真に抵抗できる農民牧師であった。この意味で彼は海老名弾正よりも柏木義円の弟子であった。そして、新島襄以後に出た最も有力な新島の弟子であった。」（『敬虔なるリベラリスト 岩井文男の思想と生涯』新島学園女子短期大学、新島文化研究所編 株式会社新教出版社 一九八四年初版発行 一三五頁より）と述べています。

最後に、「同志社との出会い、それから」「それから」の部分についてお話しし、まとめとさせていただきます。私は同志社で沢山のひとと出会い、多くの貴重な経験もさせていただきました。同志社で学び、経験したことをもとに、新島学園で三十年以上も曲がりなりにも働くことができました。私の教師人生も残り僅かになって参りました昨年、神学部研修員として再び同志社で学ぶ機会を与えられ、「それから」のことを強く考えるようになりました。

つまり、「教師としての仕事を終え、それから、お前はどうか」と自分に問かけることが多くなりました。研修員時代、新島先生のことや同志社の歴史を学び直すなかで、「岩井文男の思想と生涯」が私の新たな指針となって参りました。当然のことながら岩井先生は私にとりまして雲の上の人、しかしながら先生の思想と生涯に千分の一、万分の一でも近付けたらと、恐れ多くも思っています。

今、日本の将来には暗雲がたれ込めています。長引く経済不況、少子高齢化が進むなかで、老後の問題、年金や老老介護等々、将来を思うと気が滅入ることがあります。それは若い皆さんも同じだと思います。現在就活にいそんでいる方もおられることでしょう。一回生・二回生の方もいずれそういうときがやってきます。就職氷河期での就活、就職したが果たしていつまで勤められるやら、婚活などという言葉も登場してきました。大きなお世話かもしれませんが、皆さんの将来にも暗雲がたれ込める時代になって参りました。

しかし皆さん、こうは考えられないでしょうか。私たちが将来に不安を抱くのは、「選択を迫られる際、常に得する方、人からうらやましがられる選択ばかりを選びたがるところ」に原因があるのではないのでしょうか。岩井先生の生涯をふり返ってみると、その逆で「人から見ていつも損な方、人の敬遠する道」を、自分の信念に従って選ばれました。そして、堂々たる生涯を送られました。私は人間の幸・不幸の要因はこの辺りにあるように思えるのです。つまり、世の中の、人の目に良く映る生き方を目指すのか、それとも自分の信念を大切にしたい道を選ぶのか、であります。

岩井文男の信念を貫いた生涯には新島襄と同志社スピリットが充ち満ちているように思うのですが、皆さんに少しでも感じ取っていただければ幸いです。私も同志社に学んだ者の一人として、残された人生、許された時間を同志社スピリットを誇りに過ごして行きたいと思っております。最後に、岩井先生の好まれた聖句、「コリントの信徒への手紙二」の四章一八節をお読みして講演を終わりにさせていただきます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。本日はこのような機会をいただきまして本当にありがとうございました。